す」

「ウム左様うか、然らば少時此處に控へて居れ、用意が出來たれば案内致すで」

「有難う存じます」

堅丸はデットへ控て待つて居りますと、次の間では腰元の衆が、わちや〳〵と何かさゝやいて居ります。

「アノ芙蓉さん、紅葉さん、桔梗さん、菖蒲さん」

と云ふ聲が聞へました。

「何や、花合せの札みたいな名前の女中ばかりやな」

「モシ今晩はお姫様のお氣慰めに大黒屋市兵衛の周旋で、上方の藝人噺家が參つて居るそうで、何處に居りますエ」

「ハイ〳〵其者は休息の間に居りまする」

「オヤ左様でござりますか、どうせ藝人のことでござりますゆへ、さぞめし美い男子でござりませう、何をして居ります、一寸覗いて見やうではござりませんか」

「サアお覗き遊ばせ、居りますか」

襖を細目に開いて居りましたので覗きますと、

「一寸御覽遊ばせ、役者ですか噺家は、オヤ〳〵妾は藝人やと云ふから美しい男であらうと思ひましたのに、貴女マア〳〵色の眞黒けな、全で鼻などは仰向いて水桶の紐通しみたやうな顏でござりますす」

「ほんにマア猫が茶を吹いたと云ふ事を申しますが、全で矮狗が茶を吹いたやうな顏でござりますナ」

「左様〳〵、全で太神樂の獅子みたやうな鼻で、ホヽヽヽヽ、妙な顏ぢやござりませんか」

「こら何を吐す、無茶苦茶言うてよる、人の顏を太神樂やの、矮狗が茶を吹いたやうな、其様な怪態な顏があるものか、待て〳〵、ウヌ然う吐しや、一ツ吃驚りさしてやるぞ」

「何と御覽遊ばしたか、噺家の顏は面白い顏ぢやござりませんか」

「イヘ〳〵噺家は居りません」

「左様か、今其處に居りましたが、何處ぞへ參りましたのかいナ」

と言ひながら襖をチクリ〳〵開けまして、腰元が此方をグツと覗きますと、堅丸は口に指をつけ、ベカコーと言ふて顏を突出しました。腰元は只さへ面白い顏やと思ふて居るのに、ベカコーをしたのでアレーと驚きました。その機に乘つて、

「ベカコー〳〵」

と腰元を追廻して歩きました。遂には廊下をば腰元がバタ〳〵と逃げまする、中には目を眩す者もご